

ヘッセとクジャクヤママユ

鈴木英文



クジャクヤママユ（上左：♂、上右：♀、下：繭）

ある言い伝えによれば、仏陀が最後の説法を蝶に向かって説き「私はあなた方からバラモンの経典からよりもっと多くのことを学んだ」と言ったという。これについては恐れ多くて仏陀の足元にも近づけないような私も同感である。20世紀のドイツの作家ヘルマン・ヘッセもそうであろうか、蝶蛾の出でくる短編や詩を多く残している。なかでも有名な作品が「少年の日の思い出」で、この作品はヘルマン・ヘッセが1911年に執筆した「Das Nachtpfauenauge（クジャクヤママユ）」という作品を自ら改稿して1931年「Jugendgedenken（少年の日の思い出）」として地方新聞に掲載した。日本では1947年発行の国定教科書に初めて掲載され、その後現在に至るまで70年間以上も中学国語教科書のいくつかに教材として掲載され、2012年度からは、すべての検定教科書に載っている。そのためか、ミドルヤードの展示の中で、クジャクヤママユは、いつも若い見学者（特に中高生）の方々に好評である。また中学校の国語の先生が標本を見に訪れることもある。

この物語どおりのことが、ヘッセ自身に実際に起こったかはわからないが、ある程度似た経験をしたのだろうか。ヘッセの筆力もあるのだろうか単なる作り話とは思えない迫力がある。

クジャクヤママユ (*Saturnia spini*) は、この物語の鍵となるエーミールが飼育羽化させた蛾で、ヤママユガ科クスサン属に含まれる蛾で、ヨーロッパでは南東部に主に生息し、ドイツ南東部では珍しい種である。熱帯の蝶蛾のような派手さはないが、物語の主人公があこがれたのも無理もない美しさがある。幼虫はバラ科・ヤナギ科を食べて育つ。

ドイツ文学者であり、虫屋でもある岡田朝雄氏によれば、クジャクヤママユという蛾には3種あり、それぞれオオクジャクヤママユ、クジャクヤママユ、ヒメクジャクヤママユと言われる。そのうちオオクジャクヤママユは少年のポケットに入れるには大きすぎ、ヒメクジャクヤママユはそれほど珍しい蛾ではないことから、物語の蛾はクジャクヤママユが妥当だと推測している。

ちなみにドイツとフランスでは厳密に蝶と蛾の区別はない。ドイツ語ではSchmetterling、フランス語ではPapillonが鱗翅目を現わす。

参考資料

甲斐睦朗他：中学国語1，光村図書

V・ミヒエルス編，岡田朝雄訳：ヘルマン・ヘッセ-蝶，同時代ライブラリー，岩波書店